

---

# 終わりから始まる物語

ねむこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終わりから始まる物語

### 【著者名】

ねむ二

### 【あらすじ】

笠鷺みなもはトリップものが大好きな・・・19歳。女子高生でなくともしかしたら・・・?そんな彼女がある田舎がつくとそこは怪しい台座の上だった。ここはどこ?もちろん異世界!な嬉しい展開に独特なテンションで立ち向かう彼女の明日はどっちだ! (

7/21 01 召喚を少し直しました) 不定期更新です

## 00　主人公紹介（本文ではほとんど触れない可能性が・・・）

笠鷺 みなも（かさわぎ みなも）

19歳。黒に近いこげ茶色の髪に黒目。

身長は156センチで標準体重の中でもやや細め。胸もフツーサイズ。

いつでもトリップを夢見ていたため体型と服装には気を配つていた。

髪の長さは肩まででシャギー入り。

今日は半袖の黒いTシャツに、白とライトグレーのストライプ膝下スカート。

靴はローヒールサンダル。夏なので素足。

天涯孤独で恋人もいないと豪語するけつこう苦労してきた未成年。表面的な付き合いのある友人が数人いる。

トリップできれば一生の思い出として生きていけると思っている、ちょっとイタい子。

## 01 召喚（前書き）

初投稿の初心者です。拙い文章ですがよろしくおねがいします。  
7/21 少し直しました。

ぴっかーー。りりんりー

端的にいえばこんな感じだった。

それが真っ白い光の中なか白一面の世界なかわからない「ち」と、気がつけば変な台座の真ん中に立っていた・・・ということは。

こんなバカげた状況に憧れること幾星霜。

いつからだつたかその手の本を読み漁つては召喚に必要なものはなんのか常々模索していたのだ。

この年になるまで。

すつと胸元に拳を引き寄せると斜め上を見つめる。

笠鷺みなも、19歳。

いま、わたしは旅立ちます。

「おい、お前、どこを向いてしゃべっている?」

その声にはたと視線をめぐらせれば、全然まったくこれっぽっちも見たことのない絶対知り合いでない少年が、腕を組み尊大な態度で立っていた。

真っ黒なマントに真っ黒な上下。

真っ黒な髪に・・・薄茶の瞳。

・・・あつ。

こいつこいつ瞳は赤か金であつてほしかつたのに。  
しかも見るからに年下。実に惜しい。

「・・・はある。」

全身をじっくり眺めまわしてからの、とも期待はずれだといわんばかりのため息に田の前の少年の機嫌が悪くなつたようだつた。

「何者だ? どうやつてこの部屋に入った? 返答しだいでは・・・・

眉間にしわを寄せて右手を僅かに掲げる。

なんだか物騒な空氣を醸し出す少年にて、その年でこのキレやすれはまないと思った。

見た感じ年下、中学生くらいかと思つていたけど、この様子ではもう少し下かもしない。

これで万が一同じ年とか年上だったときは、この世界から早く帰してもらおう。

そつ心に警つて、いまだこじかひを睨みつけている瞳を静かに見返す。

「・・・ねえ、ちょっとまつて。たぶんここは異世界だと思つ。」

まったくもつて知らないものだけだつた。

この変な台のある部屋は8畳くらいの広さで縦じて灰色の石でできており、変な台座も黒めの石の表面に何らかの模様が彫つてあるだけの至つて地味なもの。

部屋にある明かりはぼんやり光るランプだけで、窓も扉もなく今が昼か夜かもわからない。

ふむ。

よくよく見ればこの少年、将来が楽しみなお顔立ちである。  
すっと通つた鼻筋にわずかに吊り上つた眉と田じつ。  
ちょつと丸いほつぺは幼い証。

こつちの世界の“普通”がどの程度なのかはわからないがモテない顔ではないだろ？たぶん。

わたし個人の好みでいけば好きの部類に十分入る見た目ではある。まあどう見ても平均点なわたしとでは釣り合わないのだけど。

といふことで、この子には“鑑賞用”的マークの入ったシールを貼り付ける。心の中で。

しかし田の前で何やら考えこんでいる様子の少年に呼びかけようとして軽く困ってしまった。

名前も知らない美少年に「ねえ君、」なんて口にするのは、どうしてだか変態っぽい気がしたから。

・・・・・

やつぱり何度も考えて、「ねえ君、」の後に続くのがどれもアブナイものしか浮かばない。

いくらなんでも来た早々“変態”と見なされるのは嫌だ。ここはやはり名前をお聞きするのが妥当だと思つ。

とすると・・・パツと見、シンか俺様としても『他人に名を尋ねるときは自分から名乗るべきではないのか（疑問符はつかない）』なんて言われるのがオチだ。

フラグは立てられずとも嫌われたくない。

そう意気込んで俯けていた顔を上げ、なるべく真面目な顔をする。

「・・・よ

「わたしの名前は笠鷺みなも、19歳。性別は女。成績は中の上。剣も魔法も使えない、多少馬にのれるくらいの親兄弟親戚恋人なしの一般人で・・・」

美少年くんがほぼ同時に何か言いかけたが、わたしは心に決めていた自己紹介を一息に吐き出した。

自分でもなんて使えないやつだろ？と思つ内容だったが、変に期待されては身の危険に晒されるのだ。

つまり。

「勇者と生贊は無理よ？」

何のために喚ばれたのかは知らないけれど、たいていは自分たちで解決できない何かのためなはずだから。できる」ととできな「ことは、はつきりとした方がいいと思つていた。

## 01 石碑（後書き）

「JR東海お藤みくだわつあつがいぐらじゅれこまつた。」

「勇者も生贊も特に求めていない。」

眉間にシワをよせ、不審そうな顔でそつはつきり告げられて、とりあえず生命の危険はないことを知る。

ほつと安堵の息をついたのも束の間だった。  
美少年くんの口の両端がきゅっと持ち上がる。

「私はアーシュントウワ大陸で最大を誇るアーベルエスト帝国の第三王子、フラウス＝リドルニア＝アーベルエスト。  
よつこじや、不運にして幸運な異界よりの客人よ。突然のこと心配はあるうがあなたのことは私が保護しよう。」

美少年くんの作り笑顔はとても怖い。

そんなこと身をもって知らなくてよかつたのに。

目が笑つてない美少年くん、改めフラウくんを見つめかえす。

「い、いやらしくね、フラウくん。」

ぎこちない笑みで、びつやらお世話になりそつな彼に挨拶する。  
その瞬間、ぴくつと器用に片眉だけ上げてフラウくんは笑顔のまま目を細めた。

「フラウ、くん？・・・私の名はフラウスだ。呼び捨てでかまわん。」

「うん、わかった。じゃあフラウ、わたし元の世界に帰れるかな？」  
「だからフラウスだと・・・はあ。善処はしよつ。」

「ふいっ」とやられられた顔はどこか呆れを含んでいたようだつたナビ、わたしにはその顔を観察している余裕はなかつた。

フランクは帰れるつていわなかつた。

“善処する”とは現時点で帰る手段がないことを表してこむとじや？  
うーん・・・ま、いつか。  
きっとどうにかなるよな。

うん、と一つ頷いてから二つぱりをじづひと見てこむフランクに視線を合わせる。

先ほどから少しづつ肌寒くなつてきていた。  
もしかしたら日が沈んだのかもしれない。

「ねえ、こゝ少し寒いんだけど他の部屋にいかない？」

腕をさするよじてながらあたりを見回し、ぶるりと震える。  
石造りの部屋に暖房器具のよつなものはない。

「・・・だからお前は不運にして幸運だといったのだ。不運だつたのはこの間に偶々お前がこゝへ來たこと。幸運だつたのはこの部屋に私がいたことだ。本来、この場所は立入禁止だ。」

・・・それはつまり、わたしがこの出入口のない部屋でのたれ死んでいた可能性が一番高かつたということでは・・・?  
驚愕の新事実に目玉が落ちるんぢやないかといつぼど田を見開く。  
ついでフランクに駆け寄ると、わたしの勢いにおされたよつな彼の両手を取りぎゅっと握り締める。

「ありがとうフランクー。こゝにいてくれてーー。」

その手をぶんぶん振りながら、わたしを召喚したのはフランクではな

かつたのだと理解した。

あのあと、フランウガが呪文のよつなものを早くと部屋の様子が一瞬でかわって、暖かい部屋に「移動した」と言われた。

魔法がある。

やつぱりファンタジー世界などだと、少し興奮気味のわたしにフランウは言った。

「ふむ、お前は魔力がないな。」

な、そんな馬鹿な！

お約束はどこへいった！？

すつごい魔法が使えるようになつて左うちわでウハウハではなかつたのか！？

よろり、とよろけた足が何かを踏んづける。

「じてつー！」

その声にぎょっとして振り返れば、赤茶の髪に青い瞳の男が少し涙目で立っていた。

見たところ20歳くらいで、汚れ一つない白い騎士服のよつなもののが目に眩しい。

髪はくせ毛なのかあけこみとんでも、田のあたりまでの前髪を6・4くらいでわけている。

吊り田加減が猫を連想させる男だった。

「“みんなさーーー！」

一応年上やうなのと初対面なので、慌ててそこからビクビクと頭を下げる。

白い騎士服の裾は膝まであり、その下には白いズボンとベージュのブーツがのぞいていた。

そしてその腰にある剣の柄と鞘を見てさりにファンタジー感がアップする。

「いいえ、後ろに立っていた俺が悪いんです。気にしないでください。」

その言葉にゅうくじ頭を上げると、ヒヒッと笑つて片手を差し出す彼にわたしも笑顔で片手を差し出した。

「はじめまして、ウォレス＝マーノスです。こんな素敵なお会いできて光榮です。」

「笠鷺みなもです。いらっしゃりしあじくお願いします。」

ぎゅっと手を握つて、さうりてこと笑うウォレスさんは爽やかだった。

次の言葉を口にするまでは。

「俺、ご主人の下僕に立候補してもいいですか？ フラウス殿下？」

・・・うん？

何かいま耳慣れない言葉が聞こえたような・・・気のせいかな。うん。

なぜか引を繋る類でフワウを見れば、やる気なさげに頷いていた。

「ああ、元々お前に頼むつもりだつたしな。住まいは南区の縁の館をつかうとこー。」

「どうやらお家をゲットしたようだが一つ大きな問題が・・・  
気にしたら負けだ。うん。

どこかぼんやりしてるとフワウに「承知しました」と答えたウォレスさんが、いまだ繋いだままの手をもう片方の手で包み込んだ。

「このウォレス＝マーノス、ご主人によりこんでいただけるよう身も心も精一杯尽くしてお仕えしますねー。」

テーブルの上のお皿には瑞々しい果物らしきものがのっている。山吹色をして表面はつるつるのぱつんぱつんだ。

形は丸く、へたはひょろひょろと細長く濃い緑色をしていた。先ほどフラウがメイドさんを呼んで持ってきてもらつたものだ。フラウを見て食べ方を真似しようとすると、横から手が伸びてきてその果物のへたをきれいにとる。にっこりと。

・・・ウォレス。

邪魔じゃない。

邪魔じゃないんだけど・・・なんというか、居た堪れない。今までこんなことされたことはないし、こんなふうに誰かがずっと傍にいたこともない。

わたしは初めてのことに始終動搖しつぱなしだ。

いくらなんでも果物くらい自分で食べられると言つてみたが、ウォレスは笑顔で抗つた。

いじめか？

これは新手のいじめなのか？

ウォレスがへたを取つた果物は甘酸っぱくて美味しかった。別にウォレスがへたを取つてくれなくても美味しさに変わりはないと思うけど。

恥ずかしさのあまり顔が熱い。

絶対真っ赤な顔をしているだらつと思いながら少し俯くと、沸騰しそうな頭で話題を探す。

「・・・あーせつ、そつだ！魔王は！？」の世界に魔王はいるの！？」

そう、たしかにこれは大事なポイントだった。  
ファンタジーならいてほしい。

それもクールビューティーなのが。

・・・戦うのは断るけど。

テーブルの上に身を乗り出し、フラウを見つめる。

「あ？ ああ、魔王なら西の山にいるだ？」

その言葉にやつた！と喜んだのも束の間、フラウはどこか尊敬の眼差しで口を開いた。

「魔王は西の山で寒さと病気に強い植物を研究している。主としては農作物で、お前の食べているティーレの実もその成果だ。」

わたしは愕然とした。

この山吹色の果物はティーレの実という名前でわたしの好物リストに堂々のランクインを果たしたこのティーレの実は魔王さまが品種改良したと？

いいひとだな、魔王さま。

おかげで勇者がいらない理由もわかつたし。  
できることなら一度お田にかかりたいものだ。  
そしてお礼を言おつ。

ティーレの実をありがとうござりました、と。

そのとおり、「ンンンン」というノックの音がした。

その音にフラウが「入れ」といふと、大きな扉が開いて一人の人物が入ってくる。

しずしずと歩くその人は柔らかい感じの美人さんで、なんだか知的な雰囲気を醸し出していた。

年は20代後半くらいで、銀色の髪は長く背中あたりで一つに纏めているようだ。

前髪の左から一割くらいを左胸の前で筒のような装飾品で留めて、その他の前髪は右側へ流して目の下あたりで切り揃えられている。近くまできて立ち止まつた美人さんの瞳の色はすみれ色だった。よく見れば不思議なことに毛先は空色に見える。毛先2~3センチほどが空色で、あとは徐々に銀髪に溶けるように混じっていくような、まさにグラデーションだった。

散髪したらどうなるんだろう？

そこでふと思つてウォレスを見た。

赤茶と思っていたウォレスの髪は毛先がこげ茶色になつていた。わかりにくく……！

ということはと改めてフラウも見る。

ぼんやりした明かりのあの部屋で真つ黒と思つていた髪は、明るい場所では一目瞭然。実は紫紺で毛先は金だった。

お前ら何者なんだ。そうかここは異世界だったね。いや、もしかしたら髪を切るたび染め直してのかも知れないし。

・・・うん。気にしないでおこう。

ただ、綺麗だとは思うよ。

フラウが立ち上がったので、わたしもなつて立ち上がる。

「ミナモ、これは宰相のリーフェス＝クラムベル。リフ、こちらは異界よりの客人、ミナモだ。」

フラウの手振りに合わせてお辞儀する。

「・・・よろしく。」

ぼそっと言った声は落ち着いた男の人の声だった。ただし背中にくるタイプ・・・いや、腰か？

初めてリーフェスさんの声を聞いた瞬間、何かわからないけど謝りたくなった。いろんなものに涙ながらに謝りたくなったのだ。そんな誘惑に耐えるように両手で骨盤をしっかりと押さえる。

「わ、わたしの名前は笠鷺みなも、19歳。性別は女。成績は中之上。剣も魔法も使えない、多少馬にのれるくらいの親兄弟親戚恋人なしの一般人でふ。」

どうやらかなり混乱していたようで、フラウにした“心に決めた自己紹介”をしてしまったようだった。

しかも最後に思いきり噛んだし。

## 06 シール貼付、二人目

リーフェスさんとしばらく見つめあう。

透明な輝きを放つすみれ色の瞳に見つめられて、なぜか背中には冷や汗が流れた。

声もあれだけど田もある感じがする。

泣いて謝りたくなるあれ。

気を抜いては座りそうになる体にぐっと力を入れて胸をそらす。どれくらい見つめあっていたのか、ふいにリ・フェスさんがこくりと頷いた。

そして小さく会釈を残して無言で部屋を出て行ってしまう。

・・・な、なんだつたの？

まさか見えない力でわたしの何かがわかつてしまつたとか？

よくわからなかつたがそつと息を吐き出し振り返れば、うつすらと頬を染めて見上げるウォレスがいた。

どうしたお前。

やはり最初からおかしかつたが、きっと今もおかしいのだろう。

少し可哀想になつて、たぶん視線もそくなつたはずなのに。

ウォレスはさらに頬を染めるとうつとりと・・・うん、見なかつたことにしよう。

ソファに座りなおし、ティーレの実の残りを食べる。へたはすでにない。

「では早速で悪いが縁の館に行つてくれ。家具も一通りは揃つているはずだ。定期的に手入れはしているが、気になることがあつたらウォレスに言うか私に言ってこい。私は少し所用があるので同行は・

・・ウォレス、いつまでも阿呆面を晒すな、みつともない。館までミナモを案内してやれ。」

立つたまま見下ろした形でそう言ったフラウが扉に向かう。その背中に「フラウありがと」と言って手を振った。手は見えてないと思つたけど肩越しに振り返つたフラウが左手を軽く上げる。

その所作は気品と慣れを感じさせて、やはり一国の王子を名乗るだけはあると思つ。

見たところ中学生くらいなのに、命令し慣れた態度と口調はちゃんと王子様。

フラウが第三王子と云ふのはお兄ちゃんがあと一人いるということ?

あれ? そういうえばみんなの年齢きいてないけど・・・ま、いつか。見た目とあまり差があるとは思えないし。

お城の外観はこのうえなくヨーロッパ調だつた。

歩いた道のりはわたしには複雑で、あの部屋に戻れない自信がある。ウォレスに案内されて縁の館へ向かう途中、お城の廊下やお城の外でいろんな人とすれ違う。

その度に女人がちらちらとウォレスを見ていた。

見た目のかっこよさは認めよう。

でもこの人は知つてはいけないものを持つている気がする。  
見た目はいいのに・・・見た目だけは。

なんだか残念な気分でウォレスにも“鑑賞用”のマークの入つたシ

ールを貼り付けた。

もちろん心の中で。

南区にある緑の館までもつ少し。

この世界のひとたちなら一瞬で移動できるやつだけど、わたしには無理。なので町並みと道を少しずつ覚えなければならぬ。ちゃんと言えきるまではウォレスが付き添ってくれるらし。

「ウォレス、さんは……」

いけないけない。つい呼び捨てにしちゃうになつた。  
いくらあんな宣言をされたとしても、年上そつなひとを呼び捨てる  
なんて。

「ウォレスとお呼びください。」

右手を胸にあてて、元気。

やや小首を傾げたその様子はまさに爽やかな騎士だった。

「じゃあわたしのことは、みなもと呼んでください。」

「そ、れは……できれば、主人自身の名をお呼びしたいのですが…」

「？？？あーそうかそうか。えっと、まだいらっしゃるじめんな  
さい。姓が笠鷺で名前がみなもなの。」

ところはフライは名前で呼んだのではなく、姓のつもりだった  
の？あの瞬間、ちょっとどきつとしたのに。少し剥がれかけていた  
フライのシールをしつかり貼りなおす。うん、彼はいまも鑑賞用だ。  
でもよく笠鷺の“き”と、みんなの“み”的境目がわかつたな。た  
またま真ん中あたりで区切つたら当たつてただけか？？？ま、い

つか。今度からこの世界で名乗るときは姓をあとに言わなくては。読んだ本の中にもそういうのあつたのにすっかり忘れてたな。うーん、案外パニックだつたのかもしれない。

「そう、だつたのですか・・・申し訳ありません、てつきり・・・そつだ、あとで殿下にもお伝えしておきますね。」

少し氣落ち氣味にそう言つたウオレスだつたけど、セリフの後半を口にしたときの田が顔は笑っていたのにちょっと冷たかった。もしかしたらさつやと言つとけよ的なことを思つたのかもしれない。ごめんよウオレス。

「それにしてもウオレスはあんな初対面で、よくわたしの面倒みる気になつたね？誰かのお世話するの好きなの？」

ふと疑問に思つていたことを口にする。

「いえ、別段ひとのお世話が好きなわけではありませんよ。俺の足を踏んだのがミナモ様だつたからそうなつただけで、他のものなら斬つて捨て、いえ、放置ですね。」

「いまたしても幻聴が・・・うん、気にしない。わたしは何も聞かなかつた。」

ただ名前に様をつけられるつて寒氣がするほど恥ずかしい。でもこれを断つたら人前で『主人と呼ばれるのか？どっちにしろ恥ずかしい思いをするなら、もう二つちでいいのかも。』

「わたしのこと何も知らないシフラウの紹介もまだの“どこの馬の骨とも知れない人間”だつたのに？」

「ははは、ミナモ様が何者でもかまいませんよ。その踵が俺の足を踏んだのですから当然の成り行きです。」

「…………なにが？なにが当然なの？？」

大きく頷き満面の笑みを浮かべる顔からそっと視線をはずす。深く聞いてはいけないと思つ。

「えーっと、最初フラウは恐ろしい作り笑顔向けてきたよ？」

「それはまあ、フラウス殿下ですからね。それに人の上にたつものが初対面の人間を無条件で信じるようなことはしませんよ。」

「じゃあ、よくわたしのこと信じてくれたね。」

怪しい人間が寒いと言つたからつてあんな素敵な部屋に連れてつてくれるなんて。それとも無害に見えたのだろうか？ふーんと少し頷きながら、視線を下げて道に並んだ石畳を見る。

「信じたというか、それをいろいろ解決するためにあの部屋に移つたわけなんですが、じっくり見て殿下も気づいたんでしきう。髪の色が單一で魔力がない人間はこの世界にはいませんから。俺もその髪に見惚れていて、うっかり距離をあけるのを忘れたおかげで足を踏まれてしましましたし。」

ふふつとはにかんだ笑顔を向ける白衣の騎士。

もちろん後半は聞かなかつた。ウォレスの扱いに少しほは慣れただす。

それにもいろいろ解決つて何？・・・さうつと言つてくれたけど、それはわたしが拷問でも受けられる可能性があつたということでは？魔力ゼロは正直残念だけど拷問に比べたらマシだったのかもしない。

「そついえば部屋を移動したのって一瞬だつたよ? ビハシヒウォレスは突然現れたわたしに驚かなかつたの?」

「ああ、それはミナモ様が部屋を移つてくる前にフラウス殿下から連絡をいただいていたんですよ。“異世界人と名乗る人物が召喚の間にいる、今から連れて行く”とね。」

あ、もしかしたらあの移動の呪文と思っていたものがそうだつたりしたのかも? そう思い出して、もう一つ疑問がわく。じゃアリーフエスさんは? あの部屋でフラウが何か呟いていたところを見たことはないから・・・電波か? テレパシーか??

「リーフエスさんは? リーフエスさんもタイミングをはかつたみたいにやつてきたけど・・・」

「たぶんメイドにティーレの実を持つてくるよう言つたときにも言伝たんでしょう。いくらあの宰相閣下でもそんな都合よく・・・まあ、あの方ならありえるかもしませんが・・・」

「うなんだ、ありえるんだ・・・

先の読めない無表情と態度は宰相といつ役職にはもつてこいだと思う。

でも宰相があれでこの国は大丈夫なのだろうか。他の国が泣いたりしないのだろうか? わたしが泣いて謝りたくなつたあの声と眼差しで。・・・ああ、慣れか。

わたしあの国で暮らすならあれに慣れるしかないのかもしない。

少し傾いた太陽を見上げる。

大通りを抜けさらにいくつか住宅街を通り抜けて、今度は高い塀を越えてまだ少し歩いたところに館はあつた。振り返ったさきにあるお城はけつこう近い。おかしいな?かなり歩いたはずなんだけど・・・ま、いつか。

辿り着いた緑の館は「たしかに緑ですね」としかいえないくらい緑だった。

庭中を埋め尽くすのは鬱蒼と生い茂る樹木と草花で、家の壁一面には薦が這いそれは青い三角屋根にまで到達してほぼ覆っている。窓もかるうじて存在がわかる程度で唯一無事なのは木製の扉だけ。なので外壁の色は全くわからない。

さまざま濃さと色合いの緑が重なり、風に揺れる葉がさわさわと影をつくる。

緑の館は外張り断熱（特に夏）の工口で素敵なお家だった。

扉の鍵をあけたウォレスに「ありがと」と言つと、こり笑つてわたしの斜め後ろに下がる。その姿は騎士というより執事な感じになってきたような気がする。執事騎士か・・・うん、ウォレスならいけると思う。

これからわたしが住む家。この世界初めてのわたしの居場所。

どきどきして震える手でドアノブを握る。

棒状のドアノブをゆっくり下げる、カチッと音がした。  
そっと押し開くと見える範囲が広がっていく。

木目の床と天井、壁はクリーム色だった。

少しひんやりした室内に足を踏み入れる。

玄関と続くようになつた最初の部屋には四角いテーブルとイスのセットと低めの棚、隣の部屋には食器棚とキッチンがあつた。来客があつたら一発で食事のメニューがバレるつくりである。

右奥の部屋にはトイレらしきものと、たぶんお風呂、に相当するものだと思う。使い方がわからないのでウォレスに・・・聞いていいのだろうか？うーん、ここはやはり女性に聞くべきだ、スルーしていいところじゃない。

反対側の部屋はやや大きなベッドと本棚と小さな丸いテーブルとイスが一脚だけだった。

見て回つたものは木製のものが多く、どれもけっこうがっしりした作りに見える。

夢中で見てまわり、最後に屋根裏部屋に上がる。

屋根裏は柱が数本あるだけのがらんとした様子だった。

ふと見た三角の壁にある窓から庭の様子が見える。

白い柵に囲われた縁の範囲がこの館の敷地っぽい。けつこう広い。

間近にある窓のふちには細長いハートの形をした薺の葉がたくさんある。この葉っぱ、じっくり見れば可愛いかも。

反対側の窓からはお城が見えた。やつぱり近いと思つ。なんで？そのときウォレスが左側に立つた。今までは一步引いたところに立っていたのに。

「ね？歩くと遠いと思いませんか？俺と一緒に一瞬ですよ。」

「つづりほほえむウォレス。イヤな予感がする。

「・・・もしかして遠回り、とか・・・した?」

窺うつように見上げればウォレスは一段と笑みを深くする。

「・・・したのね?」

その笑みは肯定とどつていいんだと思つ。

すつと伸びたウォレスの右手が引き攣る口元をかすめるように触れて、左耳の横の髪を掻う。まるで流れるような動きに一瞬驚き警戒する。髪をもてあそびながらウォレスはくすつとほほえんだ。ああ、とつてもスルーしたい。

「俺はあなたの下僕です。もっと俺に頼つてください。ね?」

立候補ではなかつたのか、お前。いつの間に確定したんだ。それにわたしは認めていない。そもそも下僕はこんなことしないと思うんだよ、ウォレス。これは女性を口説く気障男のポーズではないのか。さして暑くないけど午後の太陽にやられたのかもしれない。

わたしはウォレスを正氣に戻すため考えた。そして、実行する。

「ウォレス、跪け。」

胸をそらし両手は腰に。顎をつんとあげ見下げるよひ。

その一言でウォレスは正氣に戻つたようだつた。さつと跪くと胸に片手をあてる。

ほんのり頬を染めてうつとり見上げるウォレスにハウスを言い渡す。

「いいから今日はもう自分が家に帰れ。」

しつしと手で追い払う素振りをすればウオレスがくらうとしたように額に手をあてて後ろに倒れそうな姿勢で止まる。器用だね。それにしてほんとに残念な気分だよ、ウオレス。

ウオレスを下僕ではなく、犬と認識した瞬間だった。

ふう。と息を吐いて屋根裏の窓から夜空を見上げる。  
夜空に浮かんだ月はオレンジ色に傾いた黄色で、見慣れたものより  
は大きかった。

この世界にきてはじめての夜。

あのあとフラウが手配してくれた食材や食器などが届けられた。  
日常生活を送るついで必要そうなものをかたっぱしから。  
中には出来上がった料理も含まれていて、その点はとても助かった。

ふう。物憂げに漏れるため息とともに庭に視線を落とす。  
月明かりをあびる庭に建つ一軒の小ぶりな家。あのとき、なぜかそ  
っちはにも荷物が運ばれていた。

そして。

ハウスを命じられたウォレスはその家に帰ったのだ。  
たしかにこの世界では距離の意味はないのかもしれないけど・・・  
まだ悪い人がいないと決まつたわけではないので、いざとなつたら  
助けにはなると思うし・・・ま、いつか。番犬がわりに。うつ！な  
に今の考えは！？・・・うん、わたしつたら疲れてるんだね、  
今日はもう寝よう。

寝室に戻り、ベッドに潜り込む。短い時間だけ夕方まで干してパンパンした布団は気持ちよかつた。

翌朝、美味しい匂いで目が覚める。また料理を宅配してくれた  
のかと眠い目をこすって起き上がり、玄関まで行こうとして・・・  
キッチン前で立ち止まる。立ち止まらざるをえなかつた。

・・・ウォレス。

なんでいるの?とかはもう聞かない。ウォレスだし。少し考えてこの世界で鍵は意味がないのでは?と思う。鍵がわりの魔法があるならいいけど・・・わたしには使えないから意味ないし。

背中を向け、ふんふんと鼻歌を歌いながら手際よく料理している赤茶の毛色を見つめる。

たしかにフライが面倒みるといつてくれたけど、そのお金はどうから出てるのかはっきりしないうちはなるべく控えたい。もし下手でも料理ができるウォレスがいれば、この世界の料理を知らないわたしはフライにたからなくても済むかもしない。あ、でも食材はフライもちか。あと、ウォレスにたかるのはやめよう。なんか怖いから。

うーん、どうにか収入を得なればと思うし、わたしにはお金になりそうな特技に心あたりはないし。はあ、あとでフライに相談しよう。うん、そうしよう。

ウォレスと一緒に食べた朝食はウォレスお手製の野菜たっぷりのステーキと丁度いい焼き加減の魚と丸いふわふわパンだった。・・・とても、恐ろしく美味しかった。騎士なのになんでだ?

「おはよ、フライ。」  
「ああ、おはよう。」

朝食後、ウォレスに一瞬で連れてきてもらったのは昨日の部屋だつた。たぶん。

フライは大きな机の上を静かに片付けるとイスから立ち上がる。きっと仕事中だつたんだ。「ごめんね？机をまわりこんだフライが近づいてくるのに合わせてわたしも近寄った。

「昨日ウォレスから聞いたが、ミナモはまだたのだな。悪かつた。

「

すうヒトヅようとする頭を荒してやめさせる。

「あーみなもでいこよーそれにいまわら姓で呼ばれるなんて、なんかちょっと・・・」

「・・・そうか、わかった。」

そう言つてかすかに笑つたフライは年相応に見えて可愛かった。これを見近で鑑賞できるなんて し あ わ せ。

「今日はなんの用だ？さうそくあの館で足りないものでもあったのか？」

腕を組んで「ほほ綱羅したはずなんだが・・・」と恥き首を傾げるフライに頭を振る。

「わたしの面倒みてくれるのはありがたいんだけど、そのお金ってやつぱり・・・税金？」

そう聞くとフライはひょっと驚いたようにわずかに目を見開いて、片手を顎にそえると思案するように視線を少し下げる。

「あー、そうであるといえるし、そうでないともいえる。あれは税金の一部をある条件で民に投資し、そのうち成功したものから

のみ割合に応じて返還されてできる余剰分だ。いつして増やしてもさらに民に投資していくもので、ん？そうすると投資といつ点であながちミナモも例外ではないな・・・異界ゆえの何かないか？」

良いこと思ついた！みたいにフリウニキラキラした目を向けられる。

「あ、う・・・『めん。それはわたしも考えたんだけど、そういうの今はちょっと思いつかなくて・・・』

「ふむ。ではミナモがあの館に住んでいる間は、あそこの管理人として国が雇おう。どうだ？」

フリウニキラナイスアイティーアー！と思つたけど、はたと気づいた。

「でもそれじゃ誰かの仕事を横取りしてしまつんじゃないのかな？手入れしてたつて言つてたし、ほら、その管理人さんとか・・・」

「いや、それなら心配ない。手入れしていたといつても、手入れの度にメイドの中から都合のついたものを何人か向かわせて、それに手当てを出していただけだ。手入れの内容は軽い掃除と補修部位の発見くらいで、彼らには普段の仕事があり給金も相応に支払われている。だいたい管理人自体いない。よつてこの仕事が必要なものは特にいないぞ。」

フリウニキラニまで言つてもらえたなら少しだけ甘えてもいいかな。できるだけいいんだけど。

「うーん、じゃあお給料がわりに食材と少しの生活費くらいで、雇つてもうかる？」

「」

「」

つとフライの様子を見ながら「これだけあればたぶん生きっこけると思つたものを口にした。

「まあ、お前がやうこいつならいいが。ただし、不足があれば遠慮なく言つていい。」

そう言ったフライが机に向かいしゃらしゃらと何か書いていく。  
最後にしゃりとペンを走らせるとい通り読み直していく間に向か  
る。

「確認しろ。」

わたしは紙を覗き込んで・・・少しだけ固まつた。

「ごめん、読めないや。そう言おうとして後ろからかけられた声に振り返る。

「いっそ、ジなたかと婚姻でも結べば手つ取り早いですよ。」

いきなり何でことを笑顔で言つのだ、ウオレス・・・  
それには出合つた翌日の朝で一体誰と結婚すると?  
万人が魔力を持つこの世界で魔力ゼロのわたしと結婚して相手に得  
なんてある?

ほーら、わたしが誰かと結婚なんてありえない。むしろこの世界じ  
や一生独身じゃないかな?ふふ。

手に持つた紙をもう一度見て、やっぱり読めないことを確認した。

「ごめん、読めないや。」

てへ、とでも効果音をつけながら頬をかいてフラウに紙を返す。  
返そうとしたわたしから紙を受け取らず、フラウはちらりとわたし  
の後ろに視線を向ける。それも2箇所に。  
何々?なんなの?わけがわからず後ろを振り返りつつとする前に両側  
に影ができる。

「結婚は俺としましようね。  
・・・識字は契約に必要。」

「ぎょーひーいいいいー声が声がーー！」

すぐ真横からのアノ声にぞわわわわわとしてウォレスを蹴つ飛ばしてフラウの机の影にダッシュで駆け込んだ。アノ声の前に何か聞こえた気もするけど絶対わたしには聞こえなかった。

それにして何の前触れもなくいきなりはキツイよ。  
どつきんどつきんしながら、そつと机の横からあたりを探ろうと顔を出す。

ウォレスがなにやら悶えてるけど無視だ。

そんなことより今は・・・

「・・・まずはミナモ。」

「つー」

真後ろからの声にわたしは文字通り飛び上がった。

慌てて机の影から飛び出し何かを踏んづけフラウのやや小さい背中にしがみつく。「ああっ」とか聞こえたが知るか！ここしか、ここしか安全な場所はないの！？

ぎゅうっとフラウの服を掴んで、机の向こう側でゆっくり立ち上がるリーフェスさんをなるべく気配を消して窺う。まあ気配なんて消したことないんだけど。

その様子にフラウが一つため息を吐いた。

「リフ、何か用があつたのではないのか？」

フラウの言葉にしばりく止まつたリーフェスさんがぽん、と手を打つた。

まつ、まさかの天然なのつーどしそう天然ボケ！？宰相が天然ボケ！？？

すっと目を細め、威厳というか美人オーラを取り戻すリーフェスさん。

「・・・隣の大陸で勇者が召喚されました。」

「勇者・・・またか、はあ。」

さも呆れたと言わんばかりに額に手をあてフラーは首を振った。  
またか、って。またなんだ。勇者って珍しくないんだ・・・  
でも勇者つていえは大抵は魔王を倒したり、って！魔王さま倒され  
ちゃだめじやない！ティーレの寒だつて魔王さまの研究成果なのに、  
その魔王さまが危ない！！

「フラー！あの兼業農家魔王さまが危険なのー？」

がっくんがっくん揺すりつとしてあんまり揺れなかつたフラーを見  
つめる。

「いや、ああ見えて魔王は強いぞ。ゆえに先代の勇者を破つて不可  
侵を誓わせたんだが・・・」

ああ見えてつて言われても会つたことないからわからないよ。  
ん？そもそも何で隣の大陸の勇者がこここの魔王さまを倒しに来るの  
？何も悪いことしてないのに。

「ねえフラー、どうして勇者がこの国を攻めるの？魔王さまがいる  
から？」

「・・・言つて、なかつたか？」

「何を？」

「・・・」は・・・魔族の国だ。」

そつ言つて僅かに目を逸らせたフラーを呆然と見つめる。



一応のつもりで驚いてみたが実感はわからなかつた。

フラウが嘘や冗談を言つてるんじゃないことはわかつてゐる。

ただ、魔族の国つて言われても思い当たるもののが何もなかつただけ。

ふと思い返してみれば、縁の館に向かうときに感じたのは平和だつた。

大通りでは子供たちがきやつきやとはしゃいでいて、通りに並んだお店では買い物力<sup>G</sup>を持ったお母さんが野菜を買ってた。住宅街に入れば奥さま方が笑顔で井戸端会議をしてたし、高い壇にあつた小さな門にいた門番さんはにこやかで、ウォレスをちら見してた人たちは頬を染めた普通の女の子たちに見えたから。

角とか翼もないし尻尾もない耳も尖つてない。笑つた口から牙が見えたこともなかつた。

わたしが出会つたのは、美形率が高めな気がするだけの普通の人々だつた。

少しのんびりした気配に気づいたのかフラウが視線だけを戻してきた。上目遣いで。

うん。やっぱり美少年の上目遣いは良いね。

それをこんなにじっくり鑑賞できるなんてこの世界はなんて素晴らしいんだ！

・・・できる」となら帰りたいけどそのまま永住してもいいかもしない。

「やはり、恐ろしいか？」

ぎゅっと拳に力を入れたフラウが苦しそうに呻く。

「・・・えっと、何が？」

間近でフラウの肌理の細かい肌を鑑賞していた視線を彼の目に向ける。

もしかして魔力のこと？わたしには無いから？

フラウたちが魔力があるだけの人間にしか見えないから何て答えていいのか迷う。

ふつと自嘲するようにほほえんだフラウはとても大人びて見えた。

「・・・我ら、魔族がだ。」

「え？ 何で？」

べつに酷いことされた覚えもないし住むところだって貸してくれるしご飯だって面倒みてくれるのに？人間だってあんまりいないと思うよ？そう思つてちょっと過去を思い出して頭を振った。  
今のところ怖がる理由をさっぱり思いつかないよ。

「それ、は・・・今まで攻めてきた人間がそつたからだが・・・」

「

わずかに眉間にしわを寄せ、困惑氣味に体を引いたフラウの両肩をがっしりと掴む。

「魔族が暇つぶしに人間を襲つてるとか人間を食べるとかしてないならわたしは怖くなんてないよ。むしろ好きだよ。大好きだよ。」

フラウの顔が。

覗き込むよつにして熱心に言つた言葉に、一瞬ぽかんとしたフラウの顔が瞬く間にピンク色に染まつた。なんかわかんないけどこの顔も良いと思つ。ところそこで“心のアルバム異世界編”に一枚追加する。

その間もじつと見つめあつていたフラウとの間に、すっと一枚の紙が差し込まれた。

それはさつきフラウが何かを書いた紙で、リーフェスさんのせいで失くした紙だつた。

「改めて自己紹介したほうがいいんじゃないですか？」

声はウオレスだつたのに、紙を持つ手はリーフェスさんのものだつた。

なんでだ。

「アーベルエスト帝国第三王子フラウス＝リドルア＝アーベルエストだ。これからもよろしく頼む。」

紫紺の髪で毛先は金色。黒い軍服のよつたに黒いマントのフワウがマントの端を軽く摘んで片足を引くと、やや膝を曲げて腰から折るように上半身をわずかに下げる。その動作につられて襟足だけ長い髪がさらりと流れた。

「ハ、いかがなさいくお願いします。」

今までの感じとがらりと変わったフラウに少し焦つて、ビビリと拳動不審気味になってしまふ。

すっと上げたフラウの顔にはかすかなほほえみがあつて琥珀色の瞳が煌いでいる。

そこから優雅に一步引いたフラウと入れ替わるよつとして田の前に立つたのはウォレスだった。

「アーベルエスト帝国近衛騎士団長ウォレス＝マーノスです。以後、お見知りおきください。」

赤茶の髪で毛先はこげ茶。白い騎士服に身を包んだ長身の男が片膝をつきにっこりと見上げてくる。普通にしてれば格好良いウォレスに、うつと体が止まる。

そこから自然な動作で右手を取られ手の甲に軽く口付けられた。とても、爽やかに。

「ヨ、ヨロシクネ・・・」

どうやら修行が足りなかつたようだ。ほほ慣れたと思つていたけどそれだけ言つのが精一杯で、こついう挨拶はどこかのお姫様にすればいいと思つ。

どうにもそのままの体勢で笑みを含んだ青い瞳を見下ろしていることが居た堪れなくなり、意を決してそつと引き抜いた右手を今度は白魚のような手にさりげなく引かれる。

銀髪に空色の毛先。足元まである淡いすみれ色のローブには細かな模様が入っている。

隣に立つたリーフェスさんはさつきまでとは比べ物にならないほどの美人オーラを纏つっていた。

「・・・アーベルエスト帝国宰相を仰ります、リーフェス＝クラムベルと申します。」

アレな声とアレな眼差しを間近で感じて慌てて腰を支えた。右手を取られたまま、やや覗き込むようにして言われた言葉にぎゅっと目を瞑る。

これ以上は目の毒だと判断したことだった、のに。ふと指先に感じた柔らかいものに驚いてはつと目を開けた瞬間、その光景を見てしまつて盛大に後悔した。

微妙に腰が引けた状態でコクコクとだけ頷く。うふふ、天然ボケでもさすが宰相。どうやらお仕事モードのリーフェスさんは逃げ道を塞ぐのが上手いようだ。

ああ見なかつたことにしたい・・・そもそも一般人にここまでしてくれなくともいいと思う。

それに三人の自己紹介、これのどこで魔族だとわかるというのか。一人もわからないよ。

予備知識がないとどう考へても魔族のまの字も出でこないと思つんだけど。

ゆっくり離された右手を庇つよつてじて左手で包む。

みんなの本気の挨拶の破壊力を身をもつて体験したところで、リーフェスさんにも“鑑賞用”的マークの入ったシールを心の中で貼り付けた。

「勇者が召喚されたんだって？」

ノックの音と落ち着いた声に振り返れば、扉のところにいたのは一人のインテリメガネだった。

日に焼けたことのなさそうな白い肌にツヤツヤの黒い髪、毛先は赤紫がかっている。

年齢は三十前あたりで、似合いすぎるノンフレームのクールメガネに白衣を着用。白衣の下は濃紺のシャツと黒めのパンツで全体的にほつそりした感じに見え、服装からいえば保健の先生か化学の先生。しかし、それを裏切る髪型だった。

下ろせば膝までありそうな長い髪をポニー テールにして、纏め部分で一回わつかを作つて残りを垂らしている。まるでの字を縦に細長くしたような髪型だった。前髪は真ん中わけで、あごまでの輪郭を覆つている。

見るな！ 気づくな！ と心中で祈つて気配を消す。じりじりとリー フェスさんの背中に隠れようとした。が、フラウたちに近寄つて長い足が止まって、こっちを、見た。ん？ と首を傾げて・・・こっちに来たー！

二歩の距離まで近づいたノンフレームメガネの奥にあるのは凍えるような水色。

白衣はサドか鬼畜と相場が決まつているのだ。いくら美形でもできればお近づきになりたくない。

なのに少し屈むようにしてメガネが顔を近づけてくる。ふつ、長い

睫毛の確認などしたくなかった。

「ああ、」Jの子が例の・・・僕は魔王、趣味は農作物の改良。よろしく、ミナモちゃん。」

なんでも名乗つてないのにバレてるの?というか例のつて何?もしかしてわたしつて噂の的?有名人?異世界から来た人とか?それとも魔力ゼロのほう?あらいやだ、そんな噂。フラグも立てられないわたしは魔力ゼロの一般市民として美形を鑑賞しながらひつそり暮らしたいんです。珍獣扱いを受けてこっちが観察されるのは欠片も望んでないんです。帰るまででいいのでスルーしてください。

そう想いをこめて穏やかな笑顔を向ける魔王さまを見返し、そつと頭を下げる。

「みなも 笠鸞です。はじめまして。えと、ティーレの実はとても美味しかったです、ありがとうございました。」

あまり頭を上げないで、すすすとリーフスさんの後ろに平行移動する。

それを見た魔王さまの瞳が笑みのまま細まつたのは気のせいではないはずだ。

ほんとにサドか鬼畜の可能性が高まって焦る。

心の中で、さつと“鑑賞用”と“要注意”のマークの入ったシールを一枚素早く貼り付けた。

「え？」

飲んでいた紅茶から顔を上げる。  
今のが聞き間違いでなければわたしはとても重要なことを耳にした  
はずだ。

隣の大陸で過去に召喚された勇者のその後。

「10年前に召喚された先代の勇者は今もこの世界について人間の城  
で隠居してるよ。彼が勇者をやめたのは僕を倒せなかつたせいにな  
つてるけど、本当は元の世界に帰れなかつたからなんだよね。」

長い足を組んで魔王さまはおつしゃつた。

応接セットのソファに座つたわたしの正面にフラウ、右隣にウォレス。

右の一人掛けにはリーフェスさん、左の一人掛けに魔王さまが座つ  
ている。

「いかにも召喚することはできても帰す方法がない、といふことど  
すね？」

確認するよつにウォレスが魔王さまに念を押している。

それに領き返した魔王さまがこつちを向いた。

「君には氣の毒だけど、僕も帰す術に心当たりがないんだ。悪いね・

・・

その心底残念そうな表情に帰れる可能性が限りなくゼロに近づいた

気がする。

でも魔王さまが知らなくても世界は広いのだ。  
もしかしたら世界のどこかには帰る方法があるかもしね。  
そう前向きに考えていたのに。

「魔王は」の世界全ての魔法や魔術に精通している。彼が知らない  
ならこの世界にはその方法は無いと言えるだろ？」

真面目顔のフラーにまで追い討ちをかけられた。

紅茶のカップを受け皿に置くと、はああとため息を吐いて頭を抱  
える。

帰れないのか・・・帰れない・・・思い残すことは何も無いとは言  
い切れないけど・・・たしか貯金は4ケタしかなかつたし。荷物は  
大家さんが何とかしてくれると思つ。あんまり家具とか置いてなか  
つたから掃除も簡単でそんなに部屋も汚してないし・・・あとは、  
あとは・・・そつか、これくらいか。

最後にもう一度だけ大きなため息を吐き出して顔を上げるとソファ  
から勢いよく立ち上がる。

なぜかウォレスも一緒に立ち上がった。騎士だから？

「これからよろしくお願ひします！」

それだけ言ってがばつと90度まで頭を下げる。

魔力もお金も何も持つてない今のわたしができるこれが精一杯の挨  
拶。

うん、こうなつたら後でバイトでも探してみよう。

第一歩としてお皿洗いとかなら文字とか関係なさそうだし、それで  
少しずつでもフラーにお金を返して残つたらできるだけ貯めとこつ。  
それに文字も覚えていかなくちゃ。帰れないなら読めないなんて言  
つてる場合じゃない。

「ミナモ・・・」

「ミナモ様・・・」

「・・・ミナモ。」

「ミナモちゃん・・・」

フラウもリーフェスさんも魔王さまもソファから立ち上がったみたいだった。

「そんなにしなくてもお前はもうこの国の民だ。安心しろ、私は民を見捨てたりしないからな。」

フラウの苦笑を含んだ声にそっと頭を上げる。わたしとテーブルを挟んだ位置に立つフラウにリーフェスさんがあの紙を手渡してた。

「・・・現時点では四人も証人があります。この場合直筆なら何ら問題はないかと。」

まさかこのままサインさせようとしているのか。

意味不明の書類にせめて文章を読んでくれないものかと思っていると、にこやかなウォレスと目が合つた。そうだ、わたしにはウォレスがいたんだったね。

「よひしければ俺が読んで差し上げましょうか?」

にこにこにしたウォレスに頬もつとして、ウォレスを見上げる。

「あれ?ミナモちゃんは」うちの文字、読めないの?」

不思議そうに聞いてきた魔王さまを振り返って頷いた。

「はー、今のところ読むのも書くのも無理です。」

魔王さまはわずかに首を傾げると「おかしいなあ」と呟き、顎先を指の背でゆっくり擦つていふ。

そして独り言のようにとんでもないことをおっしゃった。

「呪喚陣の基本として文字の習得は必ず組み込まれてるはずなんだけど・・・もしかしたら君は呪喚されたわけじゃないのかもね。」

・・・そ、そんな馬鹿な。わたしの気まぐれ異世界旅行記に終止符を打つだけでは飽き足らず、わたしの根本的存在価値にも終止符が打たれそうになつてゐる。

「でもあの部屋は誰かを呪喚する部屋だつたんですよね?どこかの誰かが喚んだんじや・・・」

「だが、実際のところ呪喚の間は現在立入禁止だ。」

フラウの硬い声に、「喚ばれてもいいのにやつてきた魔力ゼロの人間」というシールを作る。

心の中で自分にぺたりと貼ると、力なくソファに腰を下ろした。

「・・・じゃあフラウはどうしてあの部屋にいたの?」

立入禁止ならあそこはフラウがいたのはおかしくない?  
ほんやりと問い合わせるとフラウもソファに座りなおして真面目な顔で見つめてくる。

「あれは本当にただの偶然だったんだ。使用していないといつても

何らかの異変が起る可能性はある。例えば今回のよつじ。今まで無かつたことだがこういうことがあつたときに対応できるよう、月に一度私が空き時間に見て回っていたんだ。」

「……なんといつことだ。召喚がフラウの点検が終わつた後だつた場合、わたしは確実にミイラではないか。

召喚の間を思い出し、がつくりと頃垂れたわたしに魔王さまが一步近づいた。

「そのときの様子はどんな感じだつたんだい？周りが光つたとか音がしたとか、何かなかつたかい？」

どこか目を輝かせ興味津々に聞いてくる魔王さまは白衣と相まってどことなく危ない気がする。

まあ、モルモット的な意味なんだけど。

「あの・・・わたしがあの部屋に来る前の話ですけど、ぴっかーと光つて、いらっしゃーと星が散つたようなキラキラしさを感じた覚えがあります。」

「光が、そのときフラウスにはどう見えてた？」

今度はフラウに顔を向けて魔王さまがソファの肘掛に腰掛ける。

「私には光の痕跡などは感じられなかつたな。ただ気がついたときはナモが立つていただけだ。」

両肘を膝の上に置いて顔の前で指先同士を組んだフラウが真顔で答えて、数秒魔王さまと意味ありげに目を合わせる。  
ぱっと魔王さまがこっちを見てどきつとした。うん、モルモット的な意味で。

「どうせナモちゃんに何らかの力が働いたのは確かなんだけれど、やっぱり人為的な召喚とは違うみたいだね。」

腕を組んで頷きながらそう言つた魔王さまは白衣のポケットから手帳を取り出すとペラペラとページを捲つてそこにメモしていく。

「僕の方でももう少し調べてみるけど、あまり期待しないでね。あ、そうだ。どちらにしてもこの世界にいる限り文字の読み書きは必要になるだろうから・・・そうだな、解読の魔法でもあれば楽なんじやないかな。僕がかけてあげるよ。」

穏やかに微笑み、そう言ってくれた魔王さまをじっと見上げる。

あの時は外見で判断してしまったけど、もしかしたら魔王さまはサドでも鬼畜でもなくてただマッドなかもしれない。趣味は農作物の改良って言ってたし、それって良く言えばみんなのためだよね。そう思い直して改めて見てみると、ちょっとといい人に見えてきた。それに白衣とメガネを取つて、髪を下ろして黒くて長いローブを着ればクールビューティーな魔王さまになりそうだ。

うん、戦うのは無理だけど鑑賞するならもつてこいだ。

心の中では“要注意”のマークの入ったシールが剥がれかけていた。

「はい、終わり。」

魔王さまの少し冷たい手がそつと目元から離れて行く。  
魔王さまに魔法をかけてもらつたけど、目を閉じてた間も開けた後  
も特に変わつた気はしなかつた。  
横を見ればなぜカリーフエスさんががつくつと肩を落とし、その隣  
ではウォレスが蹲つていじけている。

「・・・文字を教える手が触れてキヤツ作戦が台無し。  
「ミナモ様にもつと頼られるはずだつたのに・・・」

天然宰相さまの頭の中をちよつと覗いた気がするけど、うん、ほつ  
とこり。

改めて紙を見て読めることを確かめた。

それはフラウの几帳面な文字が整然と並ぶ、雇用のための契約書だ  
った。

内容は、緑の館の管理人として雇つかわりに食材と生活費を支給す  
るというもの。

最後にフラウのサインがあつてその下にわたしの名前を書くところ  
があつた。

どきどきしながらペンを持つと、頭に書くべき文字が浮かんでそれ  
を真似する。

名前を書き終えて、フラウに見せた。

「合ってる?」

サインをじつと見たフラウが口元を緩めて頷いた。

「ああ。それに綺麗な字だな。」

真似しただけの字を褒められただけなのにちょっと嬉しい。  
わずかにニヤつて頬で、顔を上げたフラーに照れ笑いを返す。

「といひでナモちゃん。」

横からかけられた声に魔王さまを振り返る。

魔王さまはメガネをついつと直して、フラーをちらりと見た。

「君、鍵はどうしている？」

鍵なんてこの一本きりだと思って、緑の館の鍵を魔王さまの前に提示する。

それを見て魔王さまが「やつぱりね」と呟いた。

「君に魔力がないのは知ってるね？それなら鍵の魔法も使えないといつことになる。」

魔王さまの言葉に3人がはつとした顔をした。

うん、気づいてたよ。

ウォレスが不法侵入したときには。

でも何で不法侵入した本人がそんな顔するのよ。

あ、もしかして気づかれちまつた的な？

じつとウォレスを見ていると魔王さまが覗き込んできた。

「ついでに鍵の魔法もかけてあげるね？」

この世界での鍵の重要性がどの程度かわからぬけど頷いた。

もしかしたら単に一瞬で移動できる先に指定できないだけかもしれない。

「誰か許可したい人はいるかい？」

許可？どういうことかと聞いてみると、許可された人は鍵の魔法を無効化できるというではないか。つまり緑の館に入り放題ということになる。

「それじゃあフラウとウォレスでお願いします。」

二人ならまあいいかと思つてそう言つと、フラウはちょっと驚いたみたいでウォレスは輝かんばかりの笑顔になつてた。ふと、リーフェスさんと魔王さまがわずかに変な顔をしてるのに気がついた。

「・・・僕は、入つてないのかな？」

ん？と笑顔で首を傾げられて背中を何かが這い上がる。するりと手の甲で頬を撫でたりーフェスさんはお色気全開だつた。

「お、お一人もお願いします。」

一步後退つて答えた顔は引き攣つてたと思つ。

そして。わたしは求人広告を片手に、あるお店の前に立っていた。

『ネイヤ手芸店』

広告を見る。間違いない。

時給 700円（昇給有り）

時間 10:00～17:00（休憩有り）

内容 縫いぐるみの製作

（時間・曜日応相談）

広告を握り締め、睨みつけるようにお店の扉を見た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6655m/>

---

終わりから始まる物語

2010年12月3日10時30分発行